

《翻 訳》

グリフ・リス・ジョーンズ著『イギリス名詩選』

久保田 恵 理

A Japanese Translation of The Nation's Favorite:
Poems by Griff Rhys Jones

ERI KUBOTA

キーワード

英詩 (English Poetry), 翻訳 (Translation), アルフレッド・テニソン (Alfred, Lord Tennyson),
ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth), ジョン・キーツ (John Keats)

1. もし

ラドヤード・キプリング

もしすべてを失ってその件で非難されたときに
とりみださなければ
もし全ての人に疑われたときに疑われたことを
受け入れながらも
自分自身を信じることができれば
もし待つことができて待たされることに疲れな
ければ
もしくは嘘をつかれても嘘をつかなければ
もしくは嫌われても嫌われることに屈しなければ
自分自身を良く見せようとしすぎず賢すぎるよ
うに話さなければ

もし夢を見るなら 夢を自分の主人にはしてい
けない
もし思考するなら それ自体を目標にはしてい
けない
もし勝利と崩壊に遭遇したら
これら二人の詐欺師を同じ存在として扱いなさい
結果的に愚か者が異にはまってしまうような
神経を使って話した真実を聞くに耐えないなら

もしくは自分が人生に与えたことを見るために
碎いて
身を屈めて使い古された道具で真実を組み立て
なさい

もし全ての成功を一山にするなら
それをコイン投げの一転の成功にかけろ
そして負けたら再び始めからやり直せ
決して失敗に関してことばを吐くな
もし心と神経と体力を強いて
それらがなくなった後も長く自分のために尽く
させるなら
「待て」という意思を除いて
自分の中に何もないうきは待つのだ

もし群集と話せるのなら徳を保て
もしくは王たちと歩み 大衆の感覚も失うな
もし敵も愛する友人も自分を傷つけないなら
もし全ての人間に同じ価値があってありすぎる
ことがないなら
容赦のない1分を
長距離走の60秒の価値で満たせるのなら
お前は地球そのものであってその中に全てが存
在し
さらにはお前自身もその中の1人の存在となるのだ

2. シャロットの姫

アルフレッド・テニソン

1 部

大麦とライ麦の畑の片側に
長い川が流れ、
高原を覆って空と交わる。
その畑を通ると遠く離れた
キャメロットまで道が続いている。
人々は登ったり下ったりして
島のいたるところで百合が風に揺れているのを
眺めながら下の方の
シャロットの小島までおりて行く。

柳の葉は白く裏返り、ポプラは揺れて
微かなそよ風で夕闇とふるえが
永遠に続く波によって
島に流れる川をつたって
キャメロットまで流れて行く。
4つの灰色の壁と塔が
花の咲くところを見渡し
その沈黙の小島の本かげは
シャロットの姫をとり囲んでいる。

柳が覆う岸辺に
何頭かの馬に引きずられてゆっくりと
重い小舟が滑る。呼び止められることなく
絹のごときなめらかな出航で
キャメロットまでたどり着く。
しかし誰が彼女のお手振りを見たであろうか。
窓辺に彼女が立つのを見た者はいたであろうか。
その土地のすべての者に知られているのだろうか
シャロットの姫君よ。

刈り手だけが、芒のある大麦の中にいて
朝早くから刈っており、
塔のあるキャメロットの方へと
しっかりと曲がっている川の方から
陽気にこだまする歌を耳にしている。

そして月が出る頃その刈り手も疲れて
空虚な高台に束ねたものを積み上げながら
「あれが妖精のシャロットの姫だ」と囁く声を
しっかりと聞いている。

2 部

そこでは彼女は昼も夜も
さまざまな色の魔法の布を織る。
もしも彼女がキャメロットを
見下ろすようにとどまれば
呪いがかかると囁き声が言うのを耳にする。
彼女はその呪いがいかなるものか知らないので
織ることに専念して
ほとんどその他のことは気に留めない
シャロットの姫君よ。

そしてずっと彼女の前にかかっている
鮮明に映る鏡の方へ近づくと
その世界の影が現れる。
曲がりくねってキャメロットに続く
近くの街道を鏡の中に見る。
そこでは渦を巻きながら川が流れ
態度の悪い無愛想な村男たちや
赤いマントを着た市場の若い女たちが
シャロットの方から通り過ぎて行く。

時々嬉しそうな少女たちの群れが
ゆっくり歩む馬の鞍敷の上にいる大修道院長が
時々ちぢれ毛の羊飼いの若者が
長い髪の深紅の服を着た小姓が
キャメロットの塔に向かって通り過ぎる。
そして時々青い鏡を通して
騎士はふたりずつ馬に乗ってくる。
彼女には王の騎士はいない
シャロットの姫君よ。

しかし彼女はまだ喜んで織物のなかに
その鏡の魔法の光景を織る
というのもしばしば沈黙の夜のために
葬列が、光と羽をともなって

音楽を奏でながらキャメロットへ向かうからである。
 もしくは月が頭上にあるところに
 二人の若い恋人が雨上がりに来た。
 「私は世界の影のせいで半分病んでいる」と
 シャロットの姫は言った。

3 部

彼女のいる木かげの軒天から矢の届くほどのところで
 大麦の間を彼が馬に乗って通る
 太陽が葉の隙間から眩しいばかりに差し込み
 勇敢なランカスター卿の真鍮の脛当てを
 輝かせていた。
 赤十字の騎士は盾の内側で
 姫に対してひざまずき
 シャロットから離れたところで
 黄色い畑できらきらと光っていた。

宝石のような馬勒はまるで
 黄金の銀河の中につるされた
 恒星の小枝に向かって自由に伸びるようだ。
 馬勒の鐘は陽気に鳴り
 紋章の入った飾り帯のつり革から
 偉大な銀のバックルがかかり
 まるでシャロットから離れたところで
 武具を鳴らして乗馬しているようだ。

青く曇りのない空に
 厚みのある宝石がサドルレザーを輝かせ
 兜と毛皮はまるで
 キャメロットに走り去る
 とともに燃え盛る一つの炎のようにようだ。
 しばしば紫の夜に
 星屑の輝く下で
 いくつかの流れ星が光を追って
 シャロットの上空を通り過ぎて行く。

彼の幅の広いはっきりとした眉が太陽光に輝き
 戦馬は磨かれた蹄で歩く。

兜の下で彼の炭のように黒い巻き毛が
 風になびき
 キャメロットに向かって進む。
 両岸と川にいたるところを
 水晶の鏡に映って彼が輝き
 「ティラ・リラ」と川のそばで
 ランカスター卿が歌った。

彼女は織物と織り機を置いて
 部屋の中を三歩進み
 睡蓮が花開くのを見て
 兜と羽毛を見て、
 キャメロットの方を見た。
 織物が飛び上がって浮かんで広がり
 端から端まで鏡が割れた。
 「呪いが私に現れた」と
 シャロットの姫は叫んだ。

4 部

嵐の東風が吹き荒れ
 元気のない黄色の木々は弱弱しくなり
 両岸の幅の広い流れは不平を漏らし
 激しい雨が降っている低い空は
 キャメロットに近づいて行く。
 風にたなびいている柳の下で
 彼女は建物を出て船に乗り
 船首のあたりで
 「シャロットの姫」と書いた。

川が仄暗く広がるところで
 ある禿げた預言者が恍惚状態で
 彼自身の不運の全てを見ているようだった。
 生気のない顔つきで
 彼女はキャメロットの方を見た。
 そして1日が終わる頃
 彼女は鎖を緩めて横たわった。
 広い流れは彼女をはるかかなたへ押しやった。
 シャロットの姫よ。

横たわり、雪のように白く装い

右に左に大きく漂った
葉は軽やかに彼女の上に落ちて
夜の騒音のなか
彼女はキャメロットの方へと漂った。
船首が柳のしげる丘や野の合間に
沿って流されていると
シャロットの姫が
最期の歌を歌っているのを聞いた。

悲しげで神聖な祝歌を聞き
大声で歌ったり、低い声で歌ったり、
彼女の血がゆっくりと固まり
完全に瞳の色が暗くなるまで
キャメロットの方へ向かっていた。
彼女は流れに乗って
水辺に最初の馬がつく頃
歌を歌いながらシャロットの姫は死んだ。

塔とバルコニーの下に
庭の壁とギャラリーのそばで
うっすらと光る姿で彼女は浮かんでいた
高い家の間で死人の青白さ
キャメロットに沈黙
騎士や市民、貴族やそのご婦人方が
船首のあたりで
シャロットの姫と
名前を読み上げた。

これは誰だ、なんでここに。
光をあてられた宮殿の近くで
高貴な方々の声がけの中で亡くなった。
キャメロットのすべての騎士が
恐れで十字を切った。
しかしランスロットはしばしの間考えた。
彼は「美しい顔をしている」と言った。
神の慈悲がシャロットの姫に
恩恵を与えたのだった。

3. 耳をそばだてる人々

ウォルター・デ・ラ・メア

旅行者が「誰かいますか」と言って
月明かりに照らされたドアをたたいた。
彼の馬は沈黙のなかシダの茂った森林の
地面の草を食んだ。
一匹の鳥が小さい塔から飛び立ち、
その旅人の頭上を行った。
彼は再びドアを強く叩いて
「誰かいませんか」と言った。
しかし彼に答えて下りてくる者はおらず、
葉で縁取られた窓枠に頭を持たれかけたり、
彼の灰色の瞳の視界に入ってくるわけでもなく、
彼はそこで困惑して立ち止まった。
しかし亡霊のように耳をそばだてる人々だけが
孤独な家に住まう者たちであり、
月明かりの静けさのなかで
人間の世界からの声に耳をすませて立っていた。
空虚な広間につながる
暗い階段のかすかな月光に群がって立ち、
孤独な旅人の呼びかけに空気がかき回され揺さ
ぶられるなか、
耳をそばだてていた。
そして星と葉の生い茂る空のもと
馬が暗がりの芝を食いちぎっていたとき
心の中に自分自身と
彼の叫びに答える静けさを感じた。
彼は突然ドアを叩き、さらに
頭を持ち上げ、大きな音で叩いた。
「私が来たと伝えても誰も答えないので
話し続けます」と、彼は言った。
意識の残された男から
彼の話したすべての単語が
静かな家の影でこだましたのにもかかわらず
耳をそばだてていた者たちは最低限の動きもし
なかった。
ああ、彼らは彼が階段を上がって
石段に響く鉄の音を聞き、

そしてどのように沈黙がゆっくりとなかに伝
わって行くのかを
蹄の音が去って行くときに聞いた。

4. 漂っていたのではなく溺れていた

スティーブ・スミス

誰にもその死者の声が聞こえていなかったが
まだ彼は唸っていた。
「私はあなたが考えているよりはるかに遠く外
れたところで
漂っていたのではなく溺れていた。」

かわいそうな男、彼はいつもふざけているのが
好きだったが
今は亡くなっている。
彼には冷たすぎて彼の心臓はもたなかったと
言っていた。

ああ だめだ いつも冷たすぎた
(まだ死者は唸っていた)
私は人生からこんなにも遠くまで来すぎて
漂っていたのではなく、溺れていた。

5. 水仙

ウィリアム・ワーズワース

谷と丘を越えて高く浮かんでいる
雲のように一人でさまようと
私は黄金の水仙が群生して
ひとつのかたまりになっており
湖のそばで、木々の下で
そよ風に吹かれていい気分ですべて踊っているのを見た。

銀河に光り輝く
恒星のように永続的で
川岸の縁に沿って
終わりのない線を描いて伸びており
一瞥すると1万株はいたであろう

陽気な踊りに頭を上下しているのを見た。

彼らのそばで波が踊っていたが
喜びの中で輝く波よりさらに際立っていた。
そんな楽しい仲間の中には
詩人も陽気にならざるを得なかった！
私は凝視した そして凝視したが 少しも考え
もしなかった
どんな豊かさをこの光景が私にもたらしたかとい
うことは。

というのもしばしば私がカウチに横たわって
無になって考え事をしているとき、
あの光景が心の中にパッと思い浮かぶのだ
ひっそり生きることの至福
すると私の心は喜びで満たされて
水仙と一緒に踊るのだ。

6. 秋に寄せて

ジョン・キーツ

霞と実りの多い豊穡の季節
円熟した太陽の近い友人
草で作られた軒天のまわりをつたう葛と
どうやって果実の実入りを多くして祝福するか
を相談している
苔むしたコテージの木をりんごでたわませるため
全ての果実を芯まで成熟させるために
瓢箪をふくらませ、栗色の殻を丸々とさせる
甘い仁を、もっと芽を出させるために
さらには、暖かい日がなくなると彼らが考
えるまで
ミツバチのための新しい花を咲かす
というのも夏がじっとした部屋を蜜で溢れさ
せたので。

あなたの貯蔵庫であなたを見ない人はいるだろ
うか。
あなたが貯蔵庫のところに座っているのを
あちこち探す人はときどき見つけるかもしれない。

あなたの髪の毛は仰ぎあげる風に柔らかに持ち上げられる
 もしくはケシの煙にほんやりとして
 あなたの刈り取り鎌が一刈りと全ての絡まる花の収穫を惜しむ時
 半分刈り込まれた畝と畝の間の溝で音が眠っている。
 そして時には落穂拾いのように手堅く
 頭に荷物を載せて小川を横切る。
 もしくはりんご酒を絞り機のそばで忍耐強い眼差しで
 何時間も新しい汁が出てくるのを見る。

春の歌はどこに行っただろう。ああ、どこに行っただの。
 考えることはやめよう あなたはあなたの音楽も持っていることだし。
 縞のある雲が柔らかに乾いた一日を輝かせている間に
 また刈り株の平野にばら色の色調で触れるとき
 悲しげな聖歌隊である小さいブヨが嘆き
 土色の川の上でまるで風が生きたり死んだりするみたい
 上に向かったり沈んだりする。
 そして丸々と育った羊が大声で鳴く。
 丘の小川から生垣にいるコオロギは歌う。
 そして今はツバメがさえずりながら集まって
 小作地の庭からソプラノの柔らかい赤い胸を鳴らす。

7. イニスフリー湖

ウィリアム・バトラー・イエイツ

いま起きて行くつもりだ、イニスフリー湖へ
 そこには小屋が建っていて、泥と編み枝細工で作られているのだ
 9つの豆の木の列があって、ミツバチの巣箱と蜂がうるさい森林の中の空き地にひっそり過ごす。
 それで幾分か平和が保てるだろう というのも

朝のベールからコオロギが歌うところへ
 平和はゆっくり溢れ出るから。
 真夜中のすべての微光と、昼間の紫の光と
 ムネアカヒワの翼いっぱいの方。

今起きて行くつもりだ、というのもいつも一日中
 岸边で低い音をさせて湖の水が音を立てているのを聞いているからだ
 道路に立っているとき、灰色の舗道に立っているとき
 心の奥深くで私はその音を聞いている。

8. どれほど甘美で立派か

ウィルフレッド・オーウェン

略奪した土地で、年老いた老人のように体を屈め
 X脚で、老女のように横たわり、ぬかるみのなかで呪っていた
 絶えずつきまとう照明弾に自分たちの背中を向けて
 離れた休息所の方へてくてく歩き出すまで。
 男たちは眠っているように行進した。多くのものはブーツを失ったが
 片足を引きずって、流血していた。みんな足が不自由になって、盲目になった
 疲弊で憔悴し、疲れで罵りにさえ耳を傾けずにほとんどすべての者が遅れをとった。

ガスだ！ガスだ！早くしろ！手探りの忘我
 不恰好なヘルメットをなんとか間に合っただけ
 しかし誰かがまだ大声をあげてつまづいていた
 火と石灰の中にいる男のようにもたついていた
 よく見えない 霧一面と厚い緑の光
 緑の海の下にいるみたいに、彼が溺れているように見えた。

すべての夢の中で、救いようのない光景のなかで
 彼は消えそうになり、窒息し、溺死しながら私の心を突き刺す。

もしいくつかの窒息死する夢であなたもゆっくり歩くことができれば
 私たちが彼を放り込んだ護送車の後ろで
 彼の顔で白い目がもがいているのを見張る
 彼が吊るしている顔はまるで罪による悪魔の病
 もしすべての衝撃ごとに泡で崩壊した肺から
 血液がガラガラいう音を聞くことができれば、
 ガンのように不愉快で、不潔な反芻で苦しく
 罪のない舌の上の不治の痛み
 友よ、この絶望的な栄光のために
 「祖国のために死ぬことは
 甘美で立派である」という古い嘘を子どものた
 めに熱心に
 このような興を添えて語ることはないだろう

9. ナイチンゲールに寄せる歌

ジョン・キーツ

私の心臓は痛む 眠くなるような痺れが
 感覚を痛ませる ドクニンジンを飲んだかによ
 うに
 もしくは苦痛を和らげる麻薬が排水溝に流れ込
 んだように
 1分過ぎると レテ川の地区は沈んだのだ
 あなたが大変幸せなのを妬んでのことではなく、
 あなたの幸福に幸せを感じすぎて
 あなたは軽い翼を持った木の精ドリユアデ
 ある旋律的な筋書きで
 緑のブナの木 無数の影
 ゆったりとした大声で夏を歌う。

ぶどうの収穫期の盃のために！
 地中深く長い間冷やされた
 フロラの風味 田園の緑
 踊り プロヴァンスの歌 小麦色の焼けた陽気さ。
 暖かい南部でいっぱいグラス
 真実でいっぱい 紅潮したヒッポクレネ
 縁で玉状の泡がきらめく
 紫のしみのついた口
 ひょっとしたら私は酒を飲んで そして世界か

ら姿を消して
 あなたと共に森林の暗闇に消えていくかもしれ
 ない。

遠くに消え去って 溶けて
 葉の間では知らなかったことを静かに忘れる
 疲労、発熱、不機嫌
 男たちが座って互いに呻くのを聞くこの場所で
 そこは中風が震え、悲しみ、白髪が生えるよう
 なところ
 若者が青ざめ、幽霊のように細くなり、死ぬと
 ころ
 しかし考えることは悲しみでいっぱいになるこ
 とで
 無気力な目が絶望するところ
 美人が輝く瞳を保てないところか
 もしくは新しい恋人が明日以降その瞳を恋焦が
 れることがないところ。

彼方へ！彼方へ！私はあなたのところへ飛んで
 いこう
 バッカスと彼のヒョウに戦車で連れられるので
 はなく
 詩の見えない羽によって
 ぼんやりした頭が混乱し思考速度が遅くなって
 いるが
 すでにあなたと共にいる！夜は優しく
 偶然月の女王は彼女の玉座で
 星の妖精たちに囲まれている
 しかしここには天からのものを除いて光はなく
 緑に覆われた暗闇と曲がりくねった苔の道を通
 って
 そよ風と共に吹き飛ばされている。

私は足元にある花を見ることができない
 大枝から柔かな香りがするものわからないが
 防腐処理された暗闇の中でそれぞれの甘さを
 どこの草、茂み、野生の木に
 その季節にあった月が授けるのか推理する
 白いサンザシ、赤い野ばら
 すぐに色あせてしまうスマイレが葉のなかに覆わ

れている。

五月の中頃最も年かさの子ども
花盛りのムスクローズ、露を帯びたワインで
いっぱい
夏の直前に羽虫が群がる。

薄暗がりに耳をすませる 何度も
安楽な死と恋に落ちかけた
たくさんの熟考した韻で彼の柔らかな名を呼び
そっと私の静かな息を引き取るように言った
今では以前よりも死ぬことは豊かなことに見え
あなたが魂をあちこちに注ぐあいだ
このような忘我の中で
真夜中に痛みもなく私は命尽きる！
あなたは歌うだろう 私は崇高な鎮魂歌に
耳を傾けるも虚しく、ただ芝生に還るだけだ。

不滅の鳥よ、あなたは死のために生まれたのでは
ない！

あなたを踏み固める不毛の世代はない
私がこの過ぎていく夜に聞く声は
いにしえの日々に皇帝と道化によって聞かれて
いる
おそらく同じ歌であろう
ルツが悲しい心で道を見出し
故郷を懐かしみ異郷の畑で立ちすくみ涙した時と
おそらく寂れた妖精の土地で危険な海の
泡立ちに開かれた魔法の窓を
しばしば魅了した時と同じだろう。

侘しい！まさしくこの単語は鐘ようである
鐘を鳴らしてあなたからただ一つの私自身へと
引き戻す！
さようなら！欺く妖精がそうすることで有名な
ほど
空想はそんなに上手くは騙せない。
さようなら！さようなら！悲しげな歌は色あせる
中腹の上のしずかな小川の向こう側の
近くの牧草地を通り過ぎる
今は隣の谷の森林の空き地に深く埋められている
それは幻想だったのだろうか、それとも白日夢

なのか。

あの音楽は通り過ぎた 私は目覚めているの
か、それとも眠っているのか。

10. 彼は天の衣を願う

ウィリアム・バトラー・イエイツ

私は天国が縫いこまれた布を持っていた
黄金と銀の光で作られ
夜の青く薄暗く暗い
光とその半分の光の布
私はあなたの足の下に布を広げるだろう
しかし私は貧しく、夢を持っているだけなので
あなたの足の下に私の夢を広げました
私の夢の上を歩いているのでそっと歩いてくだ
さい。

11. 思い出して

クリスティアナ・ロゼッティ

私がいなくなったら私のことを思い出してね
沈黙の土地へはるか遠くに行ったとき
あなたの手が私をつかめなくなったとき
もしくは私がとどまりながらも先に行ってし
まったとき。
あなたが計画した私たちの未来について日が経
つにつれ
語らなくなったら私を思い出してね
ただ私のことを思い出してね
相談したり祈るには遅すぎるってわかるでしょう。
でももししばらく私のことを忘れていたなら
あとで思い出しても、悲しまないで
だって、私が前に考えたことの痕跡が
暗闇と崩壊を残すくらいなら
あなたが思い出して悲しくなるよりは
忘れて笑っていてくれた方が
はるかにずっと良いから。

12. 田舎の教会地区で書かれたエレジー

トマス・グレイ

晩鐘が告別の鐘を鳴らしている
短く刈り込まれた芝 草地の上をゆっくりと風
が吹き
家路に向かう農夫が疲労の道をとぼと歩く
そして私と暗闇の世界となった。

微かに光る風景が眺望の中から消えていく
甲虫が旋回してブンブン唸るのをのぞいて
全ての空気が荘厳な静けさをたたえている
眠そうな鈴の音が遠くにいる羊の群れをなだめる。

向こうの蔦で覆われた塔を残して
秘密の木かげの近くをぶらぶらしながら
ふさぎ込んだフクロウが月に不平を言って
このようないにしへの孤立した治世を妨害する。

柳の木のかげのこぼこの楡材の下
たくさんの崩れかけた塊で芝土が持ち上がると
ここに
それぞれ狭い小室に永久に横たわり
村落の先祖が無骨に眠っている。

芳しく香る暁の陽気な呼びかけ
藁で建てられた小屋からツバメがさえずる
雄鶏の明るく響き渡る甲高い声 こだます警笛
つつましい寝どころから彼らを起こすものはも
ういない。

彼らのために赤々と炉端が燃えることはない
もしくは忙しい主婦が夕暮れの家事に精を出す
ことも
父親の帰りをかたことに告げる子どもがいたり
膝に登って待望のキスを分かち合うことはない。

彼らの小さい鎌のための収穫がもたらされ
不屈の教区の耕作後の畑は荒廃した

どれほど陽気に彼らは一団を遠くに連れ出した
ことか！

彼らのしっかりとしたひと刈りでどのように木
材がたわんだか！

役に立つ苦勞を野心によってあざけ笑うことは
するな
彼らの家庭的な喜びと不確かな運命
貧民の短く単純な記録を
輕蔑的な笑顔で聞く崇高さはない。
紋章を誇り、権力の華やかさ
その全ての美しさ、富が与えた全ては
避けられることのない時間のようによく用意されて
いる。
栄光の道はしかしながら墓へとつながっている。

高慢になるな、これらは失敗に帰する
もし彼らの墓の記憶が戦利品が掲げられていな
くとも
長く続く回廊を通して荒れた地下納骨所では
鳴り響く聖歌が賞賛の調子を高める。

名高い骨壺か生氣のある胸像が
その豪邸に戻り儚い呼吸を召喚できるか。
名誉を讃える声が沈黙の死体を喚起できるのか
もしくはお世辞が鈍った冷たい死者の耳をなだ
められるのだろうか。

おそらく無視された場所で横たえられている
いくつかの心臓はかつて天界の炎で満たされて
いた
手は帝国の笏を振るい
生き行きとしたリラの音に恍惚としていたかも
しれない。

しかし彼女の長い挿話は時間を無駄にするので
豊かで
彼らの瞳への知識を記入することはなかった
震えるような貧しさが彼らのしかるべき怒りを
抑圧し
温和な血の通う魂を凍らせた。

たくさんの澄み渡った純粋な光を放つ宝石は
海洋の生んだ暗い神秘の洞窟を満たしている
たくさんの花は赤くなるために生まれながら、
見られることなく
砂漠の大気にその甘美さを無駄にする。

村のハムデンはびくともしない胸で
彼の土地のちっばけな暴君に逆らった
名誉を知られていないミルトンのような人がこ
こで休息するかもしれないし
自国の流血については無実のクロムウェルのよ
うな人がいるかもしれない。

耳を傾けている元老院に喝采を命令する。
苦痛と破滅による脅しを軽蔑し
晴れやかな土地に豊富な物資を供給し
国家の視点で国の歴史を読み

彼らの割り当ては禁じられた。孤立して周囲を
囲まれ
彼らの美德は育ち、犯罪は制限された
王座に辿り着くために虐殺の川を渡ることを禁じ
人類への慈悲を施す門を閉じたり

真実を意識してもがく激痛を隠したり
純真でいることの恥による赤面を抑えたり
贅沢と高慢の殿堂を女神の炎を輝かせる香りで
充満させることができなかった。

狂気の群集の下品な争いとは無縁で
彼らの真面目な願いが道を外れることを学ぼう
とすることは決してない
生活から隔離された冷静なバール伝いに
彼らのやり方で音のないテノールで歌い続けて
いた。

しかし侮辱からこれらの遺骨を守るため
儚い記念碑はまだ近くに立っていた
野暮な韻文と不恰好な彫刻で飾られ
通行人にため息の賛辞を懇願する。

彼らの名前と年齢は無学な女神によって綴られ
名声の場所と哀歌を与える
彼女が書き散らすたくさんの神聖な文書は
田舎の失われた道徳家を教える。

誰のための、口のきけない健忘症という餌食か
この不安な状態に喜んで身を任せ
楽しい日々の心温まる場所を去れず
後ろを見てなかなか立ち去れないで思い焦がれ
ているのを放り出すことができるのか。

情け深い胸に死去する魂が頼り
閉じゆく瞳が敬虔な雫を必要としている
墓からさえもありのままの声が叫ぶ
私たちの灰でさえも彼らの親しんだ火が生きて
いる。

あなたが不名誉な死者を覚えているのなら
これらの詩は作り話ではない話が関係している
もし孤独に熟考することがあれば偶然導かれて
同質の靈魂はあなたの運命を尋ねるかもしれない。

偶然に白髪頭の農夫が言うかもしれない
私たちは夜明けの出現で彼が
素早い足取りで疾走する露を払って
高台の芝生の上で太陽に出会うのを見た、と。

あそこの揺らいでいるブナの足元で
古い根元が絡み合ってとても高くなっており
真昼に気だるい様子で背伸びをして
さらさら流れる小川をじっくり見た。

あそこの木のところで今は微笑んで
気まぐれな空想をブツブツ言いながらうろつい
ていたかと思ったら
今度はどうだれて嘆かわしいほど青ざめて、絶
望した者のように
気を使いすぎておかしくなり、望みのない愛に
十字を切った。

ある朝、おきまりの丘で彼を見失って

荒れ野に沿って、彼のお気に入りの木の近くにも
他のところに行ったけど、小川の近くにも、
芝生の上方にも、彼のいた木のところにもいな
かった。

次に、悲しい参列による哀歌とともに
教会の道をゆっくり通って私たちは彼が押しや
られるのを見た。
近づき（あなたが読めないために）その位置を
読み、
あちらの古い茨の下に石に銘記した、と言った。

（見えざる手に撒き散らされて、年の最も初期に
スマレがどっさりあるのを見つけた。
胸の赤い鳥が好んで嘴を触れ合うのを好んでそ
こでさえずり
軽やかな足取りが大地に足跡をつけることはほ
とんどなかった。）

碑文

幸運と知られていない名声のために

若者は大地の膝に頭を休めている。
公平な科学は彼の忍耐強い誕生に眉をひそめた
わけではなく
彼女自身のために憂鬱が彼を際立たせた。

彼が惜しみなく与えられたものは大きく、彼の
魂は誠実で、
天国は大きく送られたのと同じくらいのものを
保証する
彼は彼の持っていた全てのものを苦痛に与え
た、彼は天国から
涙という（それが彼の望んだすべてであった）
一人の友人を得た。

もはや彼の功績を明らかにするために遠くを探
すことはなく
不安を恐れることから彼の弱点を引き出すこと
もない
（それらはおののいて希望が落ち着くことに似
ている）
天帝である神の御胸において。